



阿蘇の地下水

安浪 栄基

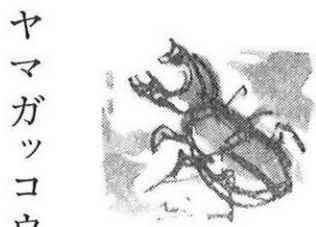
経済同友会が、熊本県の産業開発について、いまより上げていく問題の一つに、阿蘇地方の開発がある。

外輪の山並みに囲まれた広大な地域の、現在の貧弱な産業を如何にして伸ばすか。これについては県自体も真剣にとり組んでおり、そのマスター・プランは、県の阿蘇特定地域開発白書を一読すれば、その方向と意図は明白で、その壮大な気宇と構想には敬服のほかはない。

しなければ全く無意味味であるので、いま同友会が立案中の構想も、現在まで現実としてあらわれた経済的物理的事実と、この現実を基礎として、直ちに実行にうつし得る問題に限って試案を作成中である。

万少である。この数字は、県が白書の中で計画している三千百畝の開墾に必要な水が、阿蘇谷の地下水だけで十分だということになる。

とらわれることなく、将来を見通して、温かい受けいれ態勢を整えることである。



ヤマガツコウ

宮川 久子

このあいだ、ある教育雑誌を読んでいたら「ヤマガツコウ」という言葉に出会った。

仙台付近で、学校を怠けてやすむことを「ヤマガツコウ」というのだそうである。

いが、そのころは運動場と地つづきに自然の遊び場があったわけだから、休み時間に小高い草つばらに遊びに行つたまま帰つてこない者がいたり、スケッチの時間に画道具は放り出して、へびをいじめたり、野いちごを摘んだり、果てはその時間が済んで帰るときに、一人足りないから探してみると、スヤスヤ昼寝をしている者がいたりすることもあった。これこそ本当のヤマガツコウである。

この言葉はおそらくこうした環境から生れたものであろう。この牧歌的な、土臭い言葉は決して都会の中から生れるはずはないのである。

なつてしまったという次第である。この子は虫のことや魚のことなら何でも知っていた。私が教えることはすこしもおぼえてくれないくせに、綴り方を書かせると「カブトムシ」とか「エビつり」とか、いろいろのばかり書いた。彼は教師である私に、虫や魚のことを熱心に教えようとすることもあった。私のそれらに対する知識は、彼の前ではあまりに貧弱なものだったのである。

私たちは日本人が平和を念願することは、世界のどの国民にも負けないだろう。

外国の青年に大きく引きはなされつつあるのではなからうか。青少年の犯罪、特に兇悪犯もふえている。これをひとくちに「社会が悪いからだ」とか「大人が悪いからだ」などと簡単に片付けるわけにはいかない。

彼は、はじめはコソソリと机の下で虫を噛み合わせていたらしいのだが、興至って遂に授業時間だということ忘れて、教室とヤマガツコウの区別がなくな



私の心配

塚本政登士

この三つの条件のいずれを欠いても、平和を失うことになる

第一、私は、今日の平和を、これから二十年、三十年、いやもっと永く続かせるためには、最少限つぎの三つが必要である

もしも、現状のまま二十年、三十年と続いたら、日本人はきつと遊惰の民と化し、まさに、「平和」のために亡びてしまうのではないか。